二

磐音と柳次郎は、松倉町から北割下水に出ると、さらに東へ横川まで上った。

中之郷横川町界隈には、荷足舟の船頭や馬方相手の一膳飯屋や煮売り酒場が軒を連ねていた。昼の刻限にはいささか早く、まだ店も混んでいるふうはない。

「どうします、坂崎さん」

柳次郎が後ろを振り返りながら訊いた。

「美濃部三五郎どのはすべてを話したわけではない」

「というと」

「現伯どのを拐かした相手を承知している気がします」

「大頭の与力どのにご出馬願いますか」

「いや、美濃部どのとの約定もあります。竹村さんの命に関わることも確かだし、ここはわれらで調べましょう」

「竹村の旦那の家族にはどう話しますか」

「まず拐かされた現場のお常の家に行ってみましょう。さすれば、美濃部殿が申したことの真偽も分かるでしょう。ある程度、事の真相を掴んで話したほうがよいと思いませんか」

「女子供に心配かけるだけですからね。よし、竪川まで出ましょう」

方針が決まった二人の足は速くなった。横川沿いに北辻橋まで向かい、そこから竪川に沿って、東へと道を変えた。

亀戸町と亀戸村の境は竪川の北側、四ツ目之橋近くにあった。

二人が出羽鶴岡藩の抱屋敷の塀に沿って不知火現伯の愛妾、お常の家を探していると、用達の戻りか、酒屋のこそうが空の大徳利をぶら下げて通りかかった。

「竹松、こんなところまで用達か」

柳次郎が声をかけた。

「柳次郎さんか。用達のついでに掛取りに回っているんです。どこも柳次郎さんちとおっつかっつだ。すぐには払ってくれねえや」

「まあ、そう言うな。長崎河岸の常陸屋の酒で憂さを晴らしている貧乏仁がたくさんいるんだ」

「旦那が言ってますよ。本所じゃ、とても商いにならないってね」

竹松と柳次郎は古くからの知り合いか、言い合った。

「竹松、この界隈に不知火現伯の囲い者の家はないか」

「それならこの路地を抜けたところだ。黒板塀から紅梅が枝を外に差し掛けているから、すぐ分かりますよ」

「助かったぜ」

「おっ母さんに言っておいてくださいな。女中もどきの声を出して居留守の真似をするのはやめてくださいってね」

「ばれていたか」

「当たり前です。北割下水の貧乏御家人のどこに女中を雇っているところがあるんです」

「竹松、母者の苦衷を察してっくれ。近々、おれが酒代を払いに行くからな」

「当てにせずに待ってます」

竹松が空徳利を提げたまま、竪川へ歩き去った。

「面目ないが、酒のつけが滞っていましてな」

と柳次郎が苦笑いした。

二人は竹松が教えてくれた路地を抜けた。すると右手は、出羽鶴岡藩の塀があり、左手に曲がると黒板塀が見えた。鼻の盛を過ぎた紅梅が枝に一、二輪、散り残って塀の外に伸びていた。

「あれですね」

磐音たちは百坪ほどの敷地に巡らされた塀の回りをぐるりと回ってみた。すると中で物音が響いた。

「だれかいますね」

柳次郎が言い、塀に切り込まれた裏戸を押してみた。すると、すうっと開いた。柳次郎は辺りを見回し、磐音に顎で合図すると忍び込んだ。

物音は台所からだ。

柳次郎が刀の目釘を確かめ、勝手口のとを開くと、板の間に据わって茶碗などを布巾で拭いている小女と目が合った。

回りは洗って拭かれた茶碗や皿が積まれていた。

小女の浅黒い顔に怯えが走った。

「そなたは帰されたのか」

柳次郎が訊き小女はしばらく黙っていたが、

「はい、お父っつぁんの病気も大したことがございませんので、戻って来ました」

と答えた。

「ちょっと待ってくれ。話しが食い違っておる。そなたは、お父っつぁんの病気見舞いに家に戻っていたんだな。在所はどこだ」

「防州勝浦にございます」

「勝浦か。とすると、この屋の主がどうなったか知らぬのだな」

小女がこっくりと頷く。

「そなた、いつこの家に戻って来た」

「先ほどにございます」

「名はなんと申す」

「ちよです」

「おちよか。そなた、親孝行のせいで助かったぞ」

柳次郎は、おちよに事情を説明した。

「お常様が拐かされた……」

おちよが呆然と呟いた。

「おちよどの、その皿、茶碗の類を洗ったのはそなたかな」

磐音が訊いた。

「はい」

「汚れた器はどこにあったな」

「奥の今に皿や小鉢が産卵しておりました」

「済まぬが、そこへわれらを案内してくれぬか」

「磐音の言葉におちよが頷き」

「お二人はお役人様にございますか」

と訊いた。

おちよは落ち着いた挙動や物言いからお気が利く小女のようだ。

「いや、違う。現伯どのに同行して同じく行方を絶った者の朋輩だ。家族が心配しておるで、こうして探して回っておるところだ」

おちよが納得したように頷き、案内に立った。

お常の妾宅は、田の字型に四間の座敷があって、台所から一番離れた座敷が居間と寝間に使われていた。

おちよが言うように、座敷には酒や食べ物が散らかった跡が残っており、おツねを囮にして待ち受けていた一味に現伯が襲われたことを裏付けていた。

竹村武左衛門と二人の用心棒が抵抗できなかったのは、お常の身をあんじてのことだろう。ｓれにしても手際がよかった。

「お常どのは煙草を吸うかな」

「いえ、吸いません。でも、旦那様は吸われます」

現伯が拐かされた昨夜、煙草を吸う余裕があったとも思えない。すると押し入った一味が煙草を吸った跡と見たほうがいいだろう。

「おちよどの、茶碗などを洗った申したな。現伯どのを待ち伏せした一味が使ったものであろう。何人いたと思えるな」

磐音の問いにおちよはしばらく考えた後、

「酒を飲んだ茶碗は、七つにございました。その一つは、女の人が使ったかもしれません」

「お常どのではないのか」

「いえ、紅の色が違います」

「一味に女が混じっていたとは驚きですね」

柳次郎が言った。

磐音は居間から寝間に入った。敷かれていた布団は大きく乱れて、土足の跡も残されていた。

「おちよどの、お常どのと現伯どのはどこで知り合われたのかな」

再び磐音が問うた。

「お常様は肥前平戸藩のお屋敷のお女中をなされていたときに、旦那様と知り合われたそうです」

「お常どのを訪ねてこられる方がおるがな。むろん、現伯どの以外の者だな」

「あたしが奉公して一年半になりますが、ございません」

「お常どののお国はどこかな」

「武州秩父と聞いております」

「家族が参ったこともないか」

「ございません」

おちよの答えは明快だった。

「お侍様、お常様は無事でしょうか」

「なんとしても助け出さねばならぬ」

と磐音が竹村武左衛門の身を重ねて答えていた。するとおちよが、着物の襟から一枚の固紙を取り出して、磐音に差し出した。

「これが皿の下にございました」

それは奇妙な図柄の札だった。それに札の縁が捲れ上がり、だいぶ使い込まれた跡があった。

「異国の骨牌ではないかな」

「骨牌ですか」

柳次郎が覗きこむ。

「おちよどの、すまぬがこれを貸してくれぬか」

「お常様の助けになるのでしたら、お持ちください」

「今はなんでも手がかりを探すときだからな。おちよどの、なにか思い出したら、六間堀の金兵衛長屋を訪ねてくれぬか。坂崎磐音と聞いてもらえれば、すぐに分かる」

頷いたおちよが、

「お侍様、あたしは、ここにすんでいていいのでしょうか」

「お常どのらを拐かした一味が再び戻ってくると思えない。一人で怖くなければ、住むがよい」

おちよの在所は勝浦となれば、すぐには戻れまい。

磐音と柳次郎は、主のいない妾宅を出た。

「どうします」

と柳次郎が訊いた。

「品川さん、武左衛門どののことは、やはり勢津どのに話すべきでしょう」

はいと頷いた柳次郎が、

「私が話しに参りましょう」

「そうしてくれますか」

二人はそう言いながらも竪川の河岸をひたすら西に向かって歩いていた。

「坂崎さんはどうなさいますか」

「おちよどのが拾った異国の骨牌ですが、わざと残したのか。それとも時間潰しに遊んでいたものを慌てて忘れていったのか知らぬが、気にかかる。異国のことに詳しい人物がおりますので、聞いて参ろうかと思う」

磐音の頭には蘭医の中川淳庵の顔が浮かんでいた。

「そうですね。江戸の者がこんな骨牌で遊ぶわけもないからな」

「品川さん、勢津どのを訪ねる前、金兵衛長屋に立ち寄ってくれませんか」

「それは構いませんが」

柳次郎は屈託のない顔で言い、付いてきた。

六間堀の金兵衛長屋の木戸口に柳次郎を待たせた磐音は、しばし長屋に入るとすぐに姿を見せた。

「品川さん、勢津どのにこの三両を渡してもらえませんか。主の帰りがいつになるか分からぬゆえ、生計が心配でしょうからね」

「届けて参ります」

柳次郎が頷いた。

「品川さん、暮れにいささか金が入った。失礼とは存ずるが、これで先ほどの小僧さんの酒屋の付けを払ってください」

磐音は三両とは別に二両を柳次郎に差し出した。

「わが家の付けまで心配させては申し訳ない。常陸屋の払いなど晦日でよいのです」

「晦日に払う当てがありますか」

「いや、それはないが」

と苦笑いした柳次郎が、

「坂崎さん、一両で釣りがきますよ」

「ならば残りは母上にお渡しください」

「相済まぬことです」

「お互い様ですよ」

磐音と柳次郎は六間堀端で別れた。

磐音が振り向くと、南割下水に急ぐ柳次郎の背中が躍っていた。

大老酒井忠勝を出した若狭小浜藩十万三千五百石の江戸藩邸は、神田川の昌平橋の南側にあった。

磐音が門番に訪いを告げると、しばらく門前で待たされた。

小浜藩と向き合った丹波篠山藩の門前の出入りをなんとなく眺めていると、背で声がした。

「これは珍しい方の到来ですね」

坊主頭の中川淳庵がにこにこと笑っていた。

長崎に旅した仲だ。互いに気心が知れていて、信頼し合っていた。

「血覚上人の一味は、現れませんか」

「このところ藩務が多い上に翻訳の推敲に追われて、出歩くことがございません。奴らもさすがに藩邸内部までは姿を見せませぬな」

中川淳庵は、前野良沢、過ぎた玄白らと『ターヘル・アナトミア』という名の解剖の手引書を翻訳していた。

血書く上人一派は、人の体に刃物を当てるなど畜生の仕業と、蘭学を志す淳案たちの命を付け狙い、その偉業を阻止しようとしていた。

「坂崎さんの用向きは、込み入ったことですか」

「いえ、これを見ていただきたいだけです」

と不知火現伯の愛妾、お常の家に残された骨牌を見せた。

「ほう、南蛮骨牌ですか」

と入った淳庵は、

「まってください」

と磐音に言い残して玄関番の若侍に何事か申し付けた後、

「梅の盛りは過ぎたが、庭にご案内しましょう」

と小浜藩上屋敷の自慢の築庭に案内した。

泉水では番いの鴛鴦が悠然と泳ぎ、手入れの行き届いた樹木と庭石が見事に配置されて、さすがに酒井家の底力を見せ付けていた。

磐音の旧藩、豊後関前の上屋敷とは比較にならない造園だ。

「なんとも心が洗われますね」

磐音は屈託のない顔で伸びをした。

「東屋に参りましょうか」

泉水を見下ろす東屋の縁台に二人は並んで座った。

淳庵は、骨牌を仔細に見ると、

「南蛮骨牌は、うんすんとも呼ばれてますが、剣と人があることからこう呼ばれるのです。長崎にもたらされたのは結構古くて、幕府が始まったばかりのころですよ。この異国の骨牌を真似て、三池貞次が金銀の箔で装飾した豪奢な骨牌を作り、宮中などで遊ばれたそうです。これはその類ではない。間違いなく南蛮船の連中が長い航海の手遊びに使っていた札の一枚ですね。ほれ、この図柄は、金を描いたものでしてね、オウルと呼ばれる札です。この札の他に、ハウ、クル、コッフ、イスのご種類があります」

と説明した淳庵は、

「私の骨牌の知識はこんなものですが、これをどうされたのです」

「中川さんは不知火現伯どのという医師をご存知ですか」

「蘭医はそう多くいませんから、承知していますよ」

と答えた。

磐音は起こったことの一部始終を淳庵に説明した。

「坂崎さんの回りには常に荒らしが吹きまくってますな」

とそのことに呆れたふうの淳庵は、

「現箔先生ならそんなことが起こっても不思議ではありませんな。とにかく医師仲間では評判の、一切替わった人物です。患者を選ぶというか限るというか、診療代が馬鹿に高い。それに食事時にかかるように診察に参り、薬箱持ちなど供回りの飯代を暗に請求する。現伯先生を呼べば、小判が何枚も飛んでいくのです。このオウル札のように現伯先生の黄金好きはわれらの間でも有名です」

「高い診療代にもかかわらず、患者が多いということは、腕が良いということではありませんか」

複雑な顔をして小さく頷いた淳庵は、

「現伯先生が腕のよい医師であることは間違いない」

と答えた、皮肉っぽく付け足した。

「蘭学ではわれらの先達です。悪くは言いたくないが、とくに死期の迫った患者に人気があるのです」

「最後に縋る医師となれば、されに有名ではありませんか」

「命を永らえさせてくれる評判が立っているのです」

「どいうことですか」

「あくまで推量です。オピアムと呼ばれる阿片ちんきを使い、とろとろとした眠りの中で死を迎えさせるのでしょう。確かに苦しむ患者を楽にあの世にいかせるのですから、患者にも家族にもありがたい医師かもしれません。だが、医師としては、そのような道を選んで良いもんか」

淳庵とは対照的な生き方の医師が不知火現伯のようだ。

「中川さん、医師なれば、阿片は調薬できるのですね」

「さよう。痢病や痛薬として、治療や手術の際などには有効ｄせう」

「だが、それはあくまで限られた場合のみですね」

「むろん、死期が迫り、苦痛を訴えた患者に与えて痛みを和らげるのも医師としての務めでしょう。だが、現伯先生の場合は、金のある患者なれば見境なし、いや、患者はそれを求めて、本所松倉町の屋敷の門を潜るのです」

「阿片をどこで手に入れられるですか」

「南蛮からもたらされた薬を売る見世が江戸にございます。日本橋に、長崎屋という、カピタンの一行が江戸入りしたときに泊まる宿がございます。その二軒隣にある南蛮薬種屋の肥前屋が扱っております」

と答えた淳庵は、

「私の推測では、肥前屋で買い求められる阿片では足りますまい」

と洩らしたが、それ以上の推量は差し控えた。

お女中二人が茶と菓子を運んできた。

「これは恐れいります」

磐音は恐縮しながら、玄関先で若侍に命じていたのはこのことかと思った。

「部屋よりもここのほうが気も晴れます」

二人のお女中がさると淳庵が言い、

「奈緒どのは吉原にお入りになられたようですね。屋敷で中間どもが噂をしているのを聞きました」

磐音は頷くと、

「息災に暮らしていてくれるとよいのですが」

磐音はそれだけを答え、淳庵もそれ以上のことは訊かなかった。